

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17371

研究課題名(和文) 青少年の日常性を出発点とした異文化間教育 多文化社会ドイツの現実に学ぶ

研究課題名(英文) Intercultural Education from the usual days of youth: the Reality of multicultural German Society

研究代表者

伊藤 亜希子 (Ito, Akiko)

福岡大学・人文学部・講師

研究者番号：70570266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、多文化社会ドイツに生きる青少年の日常性にある共生への葛藤を出発点に、それを乗り越え、多文化共生社会の実現に向けて行動を起こしうる青少年の育成を目指した教育活動に着目し、その理念、理論的背景、教育内容及び具体的教育活動を明らかにした。特に、青少年の日常性にある共生への葛藤を把握するために、かれらの語りを活用したアンネ・フランク・センターとチェンジ・ライターズの活動に着目した。これらから、物語ることによる青少年のエンパワメントと周囲への波及効果、物語を生成する異文化間教育の理論的基盤、物語の異文化間教育「教材」としての主体的発信、2013年異文化間教育勧告との関連を提示した。

研究成果の概要(英文)： This research focusses on the conflicts on daily life of youth in multicultural German society and shows some ideals, theoretical backgrounds, contents and activities of educational programs by focusing on the conflicts for living together. For this purpose, this research takes "Anne Frank Zentrum Berlin", "Schule ohne Rassismus, Schule mit Courage", "Change Writers e.V." as examples. Through this study, I figured out the 4 following points: empowerment by the story-telling and spreading effects, theory of intercultural education for the story-telling, actively sending messages of the stories as "learning materials", the relationship of the recommendation about intercultural education by the federal ministration of education.

研究分野：異文化間教育

キーワード：異文化間教育 ドイツ 青少年教育 差別 多文化社会 物語ること

1. 研究開始当初の背景

多文化社会ドイツに生きる青少年にとって、文化的背景の異なる他者との共生への努力は名目上当然視されているが、相互の差別や偏見、レイシズムに直面し、共生への葛藤を抱えているのが現実である。かれらは、多様性に対する排他的傾向や極右傾向の高まりのなかで、学校や地域といった自分の生活空間の日常において、排除と共生の葛藤を経験しているのである。こうした現実を、青少年が如何に批判的に捉え、自身の日常性にある共生への葛藤に取り組むことができるのか。さらには、共生社会の実現に向けて如何に行動を起こしうるのか。かれらの日常性にある排除と共生の葛藤という現実注目し、それを出発点に共生社会の構築に働きかける青少年の育成に資する教育活動が求められている。

実際、ドイツにおいてはそうした現実を踏まえ、差別や偏見、レイシズムに抗する青少年教育がさまざまに展開されてきた。これは異文化間教育として注目すべき教育活動である。

しかしながら、ドイツの異文化間教育や青少年教育に関する国内の研究は、天野正治編著(1997)『ドイツの異文化間教育』(玉川大学出版会)、生田周二(1998)『統合ドイツの異文化間ユースワーク』(大空社)が上梓されて以降、体系的な研究が見られない。一方、ドイツにおいては、R. Leiprecht (2003): Alltagsrassismus.(Waxmann)が青少年の中に潜むレイシズムや学校・学校外教育におけるそれへの対応に関する検討を、W. Stender, et al. (2003): Interkulturelle und antirassistische Bildungsarbeit.(Brandes&Apsel)や R. Pates, et al. (2010): Antidiskriminierungspädagogik.(VS Verlag)が青少年を対象とした反人種主義教育の理論と実践に関する研究を行うなど、研究の展開が見られる。

以上の国内及びドイツの先行研究は、理論と実践の関連づけやその類型化に焦点化されているが、青少年の日常性に踏み込んだ実践についての言及は見られない。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究は、多文化社会ドイツに生きる青少年の日常性にある共生への葛藤を出発点に、それを乗り越え、多文化共生社会の実現に向けて行動を起こしうる青少年の育成を目指した教育活動に着目し、その理念、理論的背景、教育内容及び具体的教育活動を明らかにすることを目的とする。

具体的には、以下の3つを研究対象とする。

第一に、アンネ・フランク・センター(Anne Frank Zentrum Berlin)である。同センターはオランダのアンネ・フランク・ハウス(Anne Frank House Amsterdam, AFH)の国際関連組織の一つである。アンネ・フランクとその家族の物語を通して、第二次世界大戦時のユ

ダヤ人迫害、ホロコーストの歴史、そして現在においてもなお存在する差別や偏見、人権侵害に関する教育活動を展開している。活動の軸は、常設展と巡回展、それらに伴うワークショップにあるが、近年、AFZが特に力を入れているのは、青少年が主体となり自分たちの地域の差別や偏見の問題に取り組むプロジェクト(アンネ・フランク・メッセンジャー・プロジェクト)や青少年の目線で差別や偏見についてかれらの語りから学ぶAFHとの国際共同プロジェクト(「行動へと動き出す物語(Stories that Move)」)がある。

第二に、「レイシズムのない学校 - 勇気のある学校(Schule ohne Rassismus- Schule mit Courage, SoR-SmC)」プロジェクトである。このプロジェクトは、学校全体で暴力やレイシズム、差別に対する活動を行うことに同意し、条件を満たした場合に、SoR-SmCの称号を得て、レイシズム克服に向けた活動に取り組むものである。活動を開始した1995年に5校からスタートし、2018年3月現在ではドイツ全土に2,636校まで広がっている。活動のテーマは、民族や宗教、ジェンダー、性的指向に対し、さまざまに表れる現在のレイシズムである。学校や地域の課題に取り組むため、市や州のコーディネーターが設置され、活動を支えている。また、連邦コーディネーター事務所では、青少年の理解を深めたり、活動の参考とするためのさまざまな資料が作成されている。

第三に、社団法人「チェンジ・ライターズ(Change Writers e.V.)」である。これは、アメリカでエリン・グルーウェルによって行われた「フリーダム・ライターズ」の活動に刺激を受けた課外活動に端を発し、活動普及のため、社団法人となった。具体的な活動は、「フリーダム・ライターズ」に類するが、チームビルディングを行ったり、差別や迫害に関する映画を見たり、『アンネの日記』を読んだりしながら、自分たちも日記を綴っていく。活動を通して、関係性を構築し、自尊感情を高めることに主眼が置かれているが、参加した青少年の記した日記や活動の成果物が、社会的に不利な立場に置かれる移民青少年の理解に資するものとなっている。

これらの教育活動は、活動へのアプローチや成果の発信の仕方が異なるものの、青少年が日常で経験する民族や宗教、性差、性的指向などの異なりに対する差別や偏見、レイシズムに直面した際の共生の葛藤を活動の出発点にしている点が共通する。青少年の日常性を重視し、そこから教育活動を構築していく実相を明らかにする本研究は、多文化社会日本における教育そのものを問い直し、多文化社会の構築に資する教育のあり方を示すことに貢献しうる。

3. 研究の方法

本研究では、差別や偏見、レイシズムの現実に抗する教育として異文化間教育や反人

種主義教育に着目し、その理論と実践に関する文献研究を進める。それら研究動向を踏まえつつ、調査対象が展開する、青少年の日常性を出発点とした教育活動の具体的内容について、教育活動の担当者を訪問し、資料収集及びインタビュー調査を実施する。

(1)文献研究

差別・偏見に対する異文化間教育・反人種主義教育への注目

ドイツにおける異文化間教育研究の第一人者であるアウエルンハイマー (G. Auernheimer)、クリューガー＝ポトラツ (M. Krüger-Potratz)、ニーケ (W. Nieke) などの論考を整理し、異文化間教育の視点からの差別・偏見への取り組みに関する学術的、理論的背景を明らかにする。

また、反人種主義教育については、理論研究及び実践研究にも携わるライプレヒト (R. Leiprecht) の研究に着目し、反人種主義教育の理論的・実践的動向及び課題を明らかにする。

本研究事例に関わる実践研究

研究対象の事例は、その教育活動の担当者自らが学術的・実践的指向性を持つことから、担当者自身による論考や実践報告が見られる。これらを整理し、研究対象の実践が求められる背景と課題、実践の内容について明らかにする。

差別や偏見への取り組みに対する政策動向

ドイツ常設文部大臣会議より、1996年の異文化間教育勧告の大幅な改訂版が2013年に提出されている。この勧告から、多文化社会ドイツにおける社会的課題である差別や偏見について、如何に取組もうとしているのかを整理する。

(2)現地調査

2015年度は、本研究で初めて取り上げるチェンジ・ライターの活動概要を把握することを主眼に、チェンジ・ライターズ (Dorsten) の事務所を訪問した。そこで、概要説明を受け、かれらの活動成果をまとめた文献からでは把握し得なかった実践者の生徒への向き合い方や参加生徒の声を聴くこととした。また、映像資料やその他の資料についても提供を受けた。また、ビーレフェルト市地域統合センターによる「レイシズムのない学校」プロジェクトの取り組みについて聞き取りを行った。

2016年度は、2回の現地調査を実施した。まず第1回目は、「レイシズムのない学校」プロジェクトの連邦コーディネーター事務所とアンネ・フランク・センター (Berlin) を訪問し、聞き取り及び資料収集を行った。特に、難民の増加によって青少年の日常が大きく変化していることを念頭に、アンネ・フランク・センターがどのような教育活動を展開しようとしているのか、活動の方向性に關

する情報を得た。

第2回目は、国際人種差別撤廃デーの前後に行動週間を設定し、差別に関するさまざまなプログラムを行っているビーレフェルト市で調査を実施した。これは、全市的に多様な組織が連携して行われているが、その中心を担うのが地域統合センターであり、同市の「レイシズムのない学校」プロジェクトの学校も参加している。調査では資料収集のほか、ビーレフェルト大学で行われたシンポジウムに参加し、移民青少年と障がいといった複層差別への取り組みについて情報を得た。

2017年度は、2016年度にアンネ・フランク・センターを訪れた際に得たデータを踏まえ、アンネ・フランク・ハウス (オランダ・アムステルダム) を訪問し、青少年を対象とした国際共同プロジェクトの総括責任者にインタビューを実施した。このプロジェクトは、ムスリムやユダヤ人、同性愛者、障がい者の青少年が日常で直面する差別を基に、教育活動が構成されている。参加者の出身国 (9か国) によって文脈は異なっており、参加者の差別の物語から、それを如何に教材化していくのか聞き取りを行った。

4. 研究成果

本研究では、3つの教育活動を事例として扱ったが、3事例ともに青少年が日常を物語ることに着目している。「レイシズムのない学校」プロジェクトについては、アンネ・フランク・センターが連携パートナーであることから、同センターの物語ることに主軸を置いた活動をハンドブック等で紹介している。そのため、本研究成果のとりまとめでは、アンネ・フランク・センターとチェンジ・ライターの活動における、「物語ること」、「(生成された) 物語」に焦点化した。その結果、研究成果として以下の点を明らかにした。

第一に、物語ることによる青少年のエンパワメントと周囲への波及効果である。とりわけ、チェンジ・ライターの活動では、移民青少年が徐々に自分を物語ることによって、エンパワメントされていく様子が窺えた。日常生活における移民青少年の差別や偏見に直面した経験や自身の思いなどが、この活動の中で多くの人々にとって耳を傾ける価値のあるものとして捉えられていることを参加者は実感している。この点は、青少年の差別や偏見に関する経験の語りから出発しているアンネ・フランク・センターとアンネ・フランク・ハウスの国際共同プロジェクトにも共通するものである。

さらに、物語りは書籍や映像となり、そして教材となり、同じ経験を持つ青少年の励みとなったり、それに触れた人々の多様性理解を深める契機となっている。こうした物語は、ステレオタイプの移民青少年についての理解から、多様性を構成する「個」の理解を促すものとなっている。

第二に、物語を生成する異文化間教育の理

論的基盤である。上記のような物語が生成される場を如何に作り出すのかという点で、アンネ・フランク・センターとアンネ・フランク・ハウスが参照したのはアブラム (I. Abram) の理論であった。彼は、異文化間学習における複雑なプロセスを「アリーナ」、「イメージ」、「接触」という3つの構成要素から捉える「アリーナ・モデル」を提唱している。そして、個人が所属する集団や個人のイメージに対する空間が生じたり、葛藤や対話を含む接触があり、対話の中でその葛藤が変化していくような空間が生じるような、さまざまなアリーナで異文化間学習は成功裏に進められると述べている。これは、ニーケが「出会いの教育」と「葛藤の教育」という方向性から異文化間教育を整理したように、異文化間学習・教育には承認や葛藤、対話が必要不可欠であるということを示している。そして、そのためのアリーナ、つまり場の設定が大きな鍵であることが確認された。

第三に、物語の異文化間教育の「教材」としての主体的発信である。教育活動を提供する側としては、当然のことながらその教育活動を通しての目標を設定しているわけだが、両活動はそのなかでも青少年の主体的発信が特徴として挙げられる。例えば、チェンジ・ライターズの活動の成果が書籍や映像になった契機は、参加した移民青少年の声である。自分たちも「フリーダム・ライターズ」と同じように書籍にしよう、映像にしよう、そしてそれを多くの人に届けようと動き出し、実現させた。また、アンネ・フランク・センターの国際共同プロジェクトでは、6日間の青少年会議で時間と経験を共有し、互いの経験から学んだと実感を持った参加者が、自分たちの物語をオンラインで提供し、それが他の青少年の助けになるかもしれないと提案している。以上からは、自分たちの物語を「教材」として積極的に発信しようとする姿が窺えた。

第四に、これらの活動を異文化間教育を推進するものとして捉え、常設文部大臣会議の2013年異文化間教育勧告と関連づけた点である。アンネ・フランク・センターの活動は、一見すると歴史教育であり、異文化間教育と捉えづらいかもしれないが、過去においても異文化間教育・学習の観点から教材を作成している。とりわけドイツ人とは異なる文化的背景を持つ移民の増加と共生の課題は、同センターにとっても取り組むべき課題として捉えられ、異文化間教育にも大きく関わっている。「レイシズムのない学校」プロジェクトはさまざまなレイシズムをテーマに教育活動を展開し、必ずしも「異文化間 (interkulturell) を前面に出しているわけではない。チェンジ・ライターズも同様に、活動を移民に限定しているわけではなく、結果として参加者が移民青少年だったというものだった。この3事例から言えるのは、異文化間教育が移民とドイツ人の間の文化理解と

してのみ捉えられるわけではないということである。これは、異文化間教育の議論における文化主義批判を乗り越えるものであり、アウエルンハイマーが指摘するように、差別や偏見の問題を異文化間教育の課題として捉えていることの表れであると言えるだろう。特に、2013年異文化間教育勧告では、異文化間の開放性と構造的差別の除去という社会的課題を踏まえた上で異文化間教育の方向性を提示しており、これらの活動はこの勧告を推進する教育活動として位置づけることができる。

本研究で着目した日常性を物語る行為は、ステレオタイプ的に捉えられてしまう移民青少年をはじめ、さまざまな「異なり」を持つ青少年の声を受け止める側にリアリティを持って届けられる可能性を持つ。ステレオタイプ的な異なりについての理解が偏見や差別、そして排除につながってしまう状況において、国や文化という枠組みでなく、個に出会うことを通した多様性理解はますます重要なものとなっていく。物語を通して個に出会い、ともに社会に働きかけていけるような行動的の市民を育成する異文化間教育の実践は、ドイツに留まらず、多文化化の高まる日本においても求められるものであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- (1) 伊藤亜希子「多文化社会ドイツに生きる『私』を物語る試み—ドイツ版『フリーダム・ライターズ』の取り組みから—」『人文論叢』、福岡大学人文学部、査読無、第49巻第1号、2017年、307-334頁

〔学会発表〕(計7件)

- (1) 伊藤亜希子「排除と共生の日常を物語ることから始める異文化間教育の意義—ドイツの青少年の現実に向き合って—」異文化間教育学会第38回大会2017年6月17日、東北大学(宮城県)
- (2) Akiko Ito, Takeshi Yoshitani: The Acceptance of Religious Diversity in Japanese Schools: Focus on Muslim Children. Annual Conference of International Association for Intercultural Education (IAIE), September 6th, 2016, Evötös Loránd University, Budapest (Hungary).
- (3) 伊藤亜希子、小口功、吉谷武志「ヨーロッパにおけるムスリムを取り巻く教育の現状と課題—多文化化する日本の学校への示唆—」日本比較教育学会第52回大会、2016年6月25日、大阪大学(大阪府)
- (4) 伊藤亜希子「ドイツの異文化間教育に関

する今日的課題についての一考察

2013 年常設文部大臣会議勧告を手がかりに「異文化間教育学会第 37 回大会、2016 年 6 月 5 日、桜美林大学（東京都）

- (5) 伊藤亜希子「ドイツにおける異文化間教育の方向性—政策と理論から—」国際研究集会 2016「異文化間教育の文脈化をめぐる」2016 年 3 月 29 日、京都大学（京都府）
- (6) Akiko Ito, Takeshi Yoshitani : Education for Multicultural Children in Japan: A Case Study of Muslim Children. Annual Conference of International Association for Intercultural Education (IAIE), July 1st, 2015, University of Ioannina, Ioannina (Greece).
- (7) 伊藤亜希子「多文化社会ドイツに生きる『私』を物語る試み 青少年の日常性から出発する異文化間教育の意義」異文化間教育学会第 26 回大会、2015 年 6 月 6 日、千葉大学（千葉県）

〔その他〕(計 1 件)

- (1) 伊藤亜希子『青少年の日常性を出発点とした異文化間教育—多文化社会ドイツの現実に学ぶ—』2015 年度～2017 年度科学研究費補助金(基金分)若手研究(B)研究成果報告書、福岡大学人文学部教育・臨床心理学科、2017 年 3 月、70 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤亜希子 (ITO, Akiko)

福岡大学・人文学部・講師

研究者番号：70570266